

【サンプル】

今日のてんびん座は絶対十二位だ。

「お客様にご予約いただいた当ホテルの1015号室のお部屋ですが、他のお客様の先約が入っており、宿泊のご案内が出来ない状況です」

パンプスを履いた足がパンパンにむくんでいる。

新薬発表の学会で、1日中色んな人に挨拶回りをしたせいだ。

「あいにく本日は満室でして、至急近隣の宿泊施設を手配させていただきます。こちらの不手際で大変申し訳ございません」

近隣の宿泊施設なんて見つかるわけない。今日は学会参加者が沢山この街に訪れてるんだから。あーあ、ここに来る前にコンビニで買ったビールがぬるくなっていく……。

「もしかして、ダブルブッキングの相手って俺ですか？」

隣に立った男性が、持っていた1015号室のルームキーをフロントに置いた。

「俺は他を探すから、この子泊めてあげてよ」

「ありがとうございます！　では——」

「あの、私……この方と同室でも大丈夫ですっ！」
フロントスタッフの女性と男性が、同じくらい目を丸くして梨乃（りの）の顔をまじまじと見つめた。

＊

ルームキーを差込口に入れると、パッと部屋に明かりが灯った。シングルの部屋の奥には、ホテルスタッフがフルスピードで設置した簡易ベッドが置かれていた。

「細川さん、だっけ」

「はい」

「しつこいようだけど、本当に俺と同じ部屋で良いの？ 見ず知らずの男と——」

「あの……！」

「ん？」

ずい、と身を乗り出さずにはいられなかった。

ああ、1秒でも早く確かめたい！

「有名人の、シノジュンさん、ですよね？」

「えっ？ 俺のこと知ってるの？」

日焼けした肌。いかにも男の人って感じの、太くて無骨な指。厚みのあるたくましい体。服を着てたってわかる。間違いなくAV男優の東雲 潤（しのめ じゅん）さんだ。

「はいっ！ 大ファンなんです！ いつも動画で見えます！ 特にあの——」

そこまで口に出してようやく、自分がとんでもない発言をしたことに気がついた。

『特にあの、潮吹きまくりからの連続イキセックスの動画が好きです！』と、そう言おうとしたのだ。やばいやばいやばいやばい。これじゃあAV大好きってバラしたも同然じゃん。AV男優さんを一目見てわかる女って…。

穴があつたら生き埋めにされたいほどの気まずさを壊してくれたのは、シノジュンさんの豪快な笑い声だった。

「はっはっはっ！ 君おもしろいねえ〜！ 女性ファンに声をかけられたのは初めてだよ」

「つい勢いで……………お恥ずかしいです」

「いや、大歓迎だよ。女性にも性欲はあつて当たり前なんだから、恥ずかしがることなんてないよ」

「…っ！」

彼の優しい物言いに、その昔、唯一付き合ったことのある恋人が心臓に突き刺していっ

た言葉を思い出した。

『ね…痛いから、挿れる前に、もう少し、その、ナカ…触って欲しい……』
『はあ？　女が自分からねだるなよ。恥ずかしー奴』

そう言われたら、もう何も言えなくなった。痛みを我慢して、けど、私からだんだんエッチを先延ばしするようになって……。あんな人、今はどこにいるのか知りたくもないけど。それ以来、ずっと1人でAVを見て、自分の性欲を慰めてきた。でも、この人なら……私を、呪縛から救ってくれるかもしれない。

シノジュンさんの百戦錬磨の指をそっと盗み見た。

「あの…！　初対面でこんな頼み事するのは大変恐縮なんですが……」
「どうしたの？」

「お金をお支払いしますので、私を抱いてもらえませんか？」

彼は、フロントにいた時よりも更に目を丸くして、あっけに取られていた。

*

「さっきまでの勢いはどうしたの？　おいで」

「は、はい……………」

先にシャワーを終えたシノジュンさんは、ベッドの上で悠々とくつろいでいた。胸元のはだけたバスローブ姿は、さすがプロといった色気がある。

今から抱かれるんだ、この人に……。

首のあたりで脈が跳ねる。視線を逸らした先には、テーブルに置かれた万札。彼とおそろいのバスローブに汗が滲む。「おいで」と招かれ、後ろから抱きしめられるような形で私もベッドに座った。

「梨乃ちゃんはさ、俺の出演動画の中でどれが特に好きなの？」

「えっ？　それは……………」

「大丈夫。この格好なら顔が見えないから恥ずかしくないよ。教えて？」

お腹に巻きついていて彼の腕が、ギュッときつくなつた。

「……………あの、女優の亜麻寺ルルさんとコラボしてる動画が…好きです」

「あー、潮吹き連発からの追い打ちピストンで中出しセックスしまくるやつか」

「っ、はい……」

「じゃあ、今から一緒に見ようか」

「えっ？」

「梨乃ちゃんがシャワー浴びてる間に、テレビの有料チャンネルを登録しておいたから」

ピッ。ベッド正面にある大画面に、おっぱいを惜しげもなく堂々とさらけ出してポーズを決める女性達の画像一覧が表示された。一瞬身を固くした私に氣をとめることなく、彼はリモコンを操作した。

「あった…これだね」

「あの…すごく恥ずかしいんですが……」

「今、緊張してるでしょ？ リラックスしてエッチな気分を高めるには、AVはぴったりだと思ふよ」

それに、いつも見てるんでしょ？

最後の言葉だけ耳に唇を当て、直接鼓膜に囁かれた。

…AVって、夜に部屋を暗くして、ベッドの中で1人こっそり見るものだと思ってた…。冒頭シーンが終わり、ブラジャーの上から豊満なおっぱいを揉むシノジュンさんの手の

映像が流れ始めた。マッサージするように穏やかに触っていた手は、ブラジャーを外すと徐々に官能的な動きへと変わっていった。おっぱいの形を大胆に変え、突起をつまみ、女優さんの快樂の蕾を開いていく。私は、女優さんと一緒に喘いでしまわないよう、息を呑んだ。

「女性のカラダって、人によつて全然違うんだよ」

「……そうなんですか？」

「うん。だから同じことをすれば、誰でも同じように感じるわけじゃない」

私は、どうされたら感じるんだろう……。

テレビから目が離せなかった。

シノジュンさんの指の動きって、本当にエッチ……。私もあんな風に、乳首を弄られながらショーツのクロッチ部分をすりすりされたい……。見てるだけで感じちゃう。女性より女性のカラダのことを知り尽くしてみたい……。

「梨乃ちゃんの肌、スベスベだね」

触れるか触れないかギリギリの弱さで鎖骨を撫でられた。

「んっ……!!」

指の腹がほんの少ししか触れてないのに、ゾクツと鳥肌が立った。流れるような手つき

で親指が首筋の血管をなぞる。シノジュンさんが触る場所が、次から次へと性感帯に変えられていくみたいだ。

「テレビの女優さんは、もう手マンと乳首舐めいっぺんにされてるよ」

「っ、そう、ですわ……」

「あ、見て。お腹クネらせて1発目イッてる。あのまま休みなく手マンのスピード上げていくと、イク感覚が狭くなつて潮吹きしやすくなるんだよ」

「……………っ」

バスローブを広げられ、太ももにも指先が軽やかに行ったり来たりを繰り返す。不意に膝の裏をくすぐられ、腰がぴくんと跳ねた。

AVの女優さんは喘ぎ声がだんだん大きくなってるのに、私は焦らされるだけ……。気持ちいい、けど、早く私も女優さんみたいに激しく感じてみたい……。

「梨乃ちゃんはさあ、オナニーする時、どこをよく弄るの？」

「……っ！」

「教えて」

指が臍の周りをくると2周し、ふう、と息が漏れた。

「ク……………スです……」

「ん？」

「くっつ、クリトリ、ス、です……」

「そうなんだ。女の子のチンコだもんね。弄ったら気持ちいいよね」

シュルリとバスローブの腰のリボンが解かれ、淡いピンクの下着が露わになった。シノジュンさんの右手が恥丘に近づいていく。呼吸が速くなり、足の指をキュツと曲げた。大陰唇に到達した5本の指は、爪を立ててショーツの表面をくすぐり始めた。

「あつ、やつ、くすぐりたいっ！」

「ここの緊張もしつかりとほぐさないかね」

「ああっ！ ひやうんつ、あははっ！」

くすぐったさが間接的にクリトリスにまで届く。自在に動く彼の指は、お尻の穴の近くまでコシヨコシヨと動き回った。

「ひやつ、あつ……ああ……っ」

「だんだん喘ぎ声が変わってきたね」

「ん、うう……クリの上、ばっかりい……」

「自分からM字開脚して、腰をピクピク上下させてるよ」

「あああ、んっ、だつてえ……」

「さすが初対面の男にセックスをねだるだけあって、相当淫乱な子だね」

「それはっ、シノジュンさん……っ、んんっ、だったから……ああっ！」

「大丈夫、わかってるよ」

生まれて初めて呼ばれた『淫乱』という言葉に、うなじの産毛が粟立った。くすぐる指は弱くなったり強くなったり無造作で、全く予想がつかない。おまんこの溝をグリツとえぐられ、腰が大きく跳ねた。

「はあんっ！ はあ、はあ、はあ……」

くすぐりだけで、こんなに気持ちよくなれるの……？

この人にイカされたい……。

「緊張はとけてきたかな。ここ、湿ってる」

溝の中心に指がくい込むと、中に隠れていた愛液がじゅわ、とショーツに染みついた。「もっと気持ちよくなりたいなら、自分でショーツを脱いでごらん」

セックスへの甘い誘惑。梨乃は迷うことなく淡いピンクの、湿ったショーツを脱いだ。

「イイ子だ。梨乃ちゃんがいつもオナニーしてるクリトリスは……ここかな？」

「あ……っ」

「小粒で可愛い。弄りがいがあるよ」

「んっ、んんう……」

「シコシコするのは好き？」

「あっ、つまむのは…シタコトないです…んあっ」

「男がチンコをシコるみたいに、女の子のチンコもシコってあげると気持ちいいんだよ」

「あ、やつ…へんな感じ……んんっ、待って……」

「止めずにエロいことし続けたら気持ちよくなれるって、梨乃ちゃんなら知ってるよね」

シュ、シュ、シュ……。テレビ画面を見ないように俯いていた顔が、声の上擦りと共に上がっていく。AV女優さんは手マンによる連続イキを繰り返し、ついに画面に向かってブシャーシューッと大量の潮を吹きかけていた。

滴る水滴。まだらに色濃く染まるページュのシート。波打つように痙攣する腹部。心の奥底から快楽に溺れている、弛緩した顔。梨乃がいつもオナニーでイクシーンのひとつだ。

「このシーン、男は大抵抜けるんだけど、女性はどうかかな？」

「ん……女の人も、感じちやいます…っ、ん、あっ……」

「へえ。潮吹きは男も女も興奮させるんだ」

「しのじゅ、さん………あっ」

「イキそうなんだね。もっとシコシコしてあげる」

「こ…こわい…………っ」

「イクことが？」

梨乃はこくこくと頷いた。限界はすぐそこまで迫っている。

「いつ、いつもは1人でシてるから…ああっ、人にイクとこ見られるの…こわい、いつ……」

「大丈夫。恥ずかしいことじゃないよ」

「で、でも…んうう、イクと、頭真っ白になって……自分がどんな顔してるのかも、わかんなくなるから…あ…………っ」

「それでいいんだよ。何も考えず、全部をさらけ出してごらん」

「んん…っ！」

話している間に、愛撫がだんだん強くなっていく。

シノジュンさんが女の子のチンコだなんて言ったせいで、なぜか射精欲に駆られていく。根本から先端に向かって何かを搾り取られる動作。小さな性器に溜まった何かを一気に吐き出させるように、硬化したクリトリスの頭頂をくすぐられた。

「あ…あ…イク…イツちゃう……あああッ♡♡」

射精の代わりに嬌声を放ち、全身を痙攣させた。

ほんとに人前でイツちゃった……。ビクビク震えてるの、ん…っ、見られてる……。

「わ、わたし……っ」

「上手にイケたね。えらい、えらい」

不安で呼吸が速くなる私を、シノジュンさんは後ろから包み込むように抱きしめてくれた。彼の体から、同じ柑橘系のボディークリームの香りがする。ゆっくりと息を吐き、おずおずと彼の胸元に頭を預けた。

「落ち着いた？」

「はい……」

「人前でイクことは、恥ずかしいことじゃないよ」

頭をぽんぽんと撫でられた。

今一緒にいるのがシノジュンさんで良かった。心の底からそう思えた。

「ありがとうございます」

「お礼を言うのはまだ早いよ」

「えっ？」

「次は女優さんと同じこととしてあげる」

パッと反射的にテレビを見た。画面には、潮吹きをした女優さんの陰部に顔をうずめるシノジュンさんが映っていた。

一体どんな風に舐められてるんだろう…。

エロ漫画みたいに透けて見えたりはしないから、何をされているのかは分からない。でも、女優さんは唇を震わせ、背中をエビ反りにして短く喘いでいる。それがどんなに気持ちいいかは、同じクリトリスをもつ女なら分からない筈がなかった。

「梨乃ちゃんのクリトリス見せてね」

「えっ？」

すっかりA Vに夢中になっていたらしい。気がつくと、シノジュンさんは私の足元に移動していた。膝をぐいっと開かされる。今まさにイッている女優さんと同じポーズだ。思わず両手で秘部を隠した。

「やっ…!」

うそ…男性にアソコを間近で見られるのって、こんなに恥ずかしいの…っ!?

「A Vでは普通にやってることなのに……」

「クンニが？」

「はい……。実際に自分がされると、こんなに恥ずかしい格好なんですわ……」

セックスでは当たり前のことだから、何でもないことだって思ってた…。さっきから気持ちよくてヌルヌルになってるの、バレちゃうよ……。

「あのっ、やっぱりこの格好は……ちょっと……。お手入れあんまりしてないし、女優さんのカラダと比べると私なんて……」

唇に、人さし指を当てられた。

「『私なんて』なんか言っちゃダメだよ。梨乃ちゃんは可愛いよ。それに、チンコも、女性のアソコも、みんな違うに決まってるんだから」
「でも……」

「信用しなさい。俺が何人見てきたと思ってるの」

ダークブラウンの彼の瞳に吸い込まれるかと思った。ふわっと心が軽くなっていく。シノジュンさんは魔法が使えるのかな。

「ね？」と、そのたった1文字で説得され、秘部を覆っていた手のひらは、彼にゆつくりと剥がされていった。

「梨乃ちゃんの女の子の部分、全部見えてるよ」

「っ、言わないで下さい……っ」

「どうして？ おまんこヒクヒク動いてるよ。恥ずかしい言葉かけられるの好きなんだ」

「ちが……っ、ホントに恥ずかしいのお……っ！」

「そっか。じゃあヒクつかないように指で蓋しておこうね」

ヒダとヒダが密着するくらい狭いそこに、百戦錬磨の太い指がぬるりと侵入してきた。
あ…どうされちゃうんだろう…。

そう期待しただけで、彼の指を更に湿らせてしまった。

「はう、ん…っ」

「明日からオナニーをもっと楽しめるように、クリトリス敏感にしてあげる」

ぬろお。1度イッた突起に熱い舌が這う。指がある膣内への刺激ではなく、突起を重点的に舐められ、経験したことのない快楽に梨乃はあごを高く突き上げた。

「あ…ああ…それ、初めてで…だめえっ！」

「ん？ クンニ初めて？ それは燃えるなあ。プロとしてクンニの気持ちよさ、たっぷり教えてあげる」

突起を左右に細かく弾かれた。彼の唾液がみるみる付着しているのがわかる。濡れているクリトリスは摩擦が減り、抗えない快感を押し上げていく。背中を大きくのけ反らせた。
「はあ、んっ！ こんなつ、きもちいいの、知らない…っ！」

指でするオナニーと全然違う…っ！ 快感の調節が自分で出来なくて…勝手に気持ち良くなつてく…どうしよう…ちよつとだけ、こわい…。

「あ、あ…わたし、どうしたら…っ」

「枕そんなに握りしめて……。ちゅっ……大丈夫だよ。あと十秒以内にイかせてあげるから」
締めつける膣には、指が2本埋められている。この指はいつ動くんだろう……。でも、それを考える余裕はなかった。舌の裏側で押し潰すように突起をこすられた。

「ふあ……っ！ あ、あ、イク……イク……イッちゃうよお♡」

お尻の穴をきつく閉じる。さっきまでのザラザラとした感触と違って、ツルツルの舌裏が膨らむ突起を素早く転がし続けた。

「だめ……だめ………イクうー……♡♡」

硬直していた全身が一気に脱力した。枕から手を離し、半開きの口で息を吸い込む。

クンニって、こんなに気持ちいいものだったの……？ だからAV女優さんって、あんなに喘いでたんだ……。舐められた感触思い出しただけで、んっ……お腹、痙攣しちゃう……。

AV女優の激しい喘ぎ声が思考低下した頭に舞い込んでくる。

『あん、ああんっ！ それえ、もつとしてえ！』

まるでこの部屋に私と女優さんという2人の女性がいて、一緒に快楽に溺れているような心地になった。私がイッて、今度は女優さんの番……。

ぬち。ずっと大人しくしていた膣内の指が、的確にGスポットをこすった。

「ひゃああっ！ な、なに……」

「中と外、両方とも気持ちよくなる方法だよ」

シノジュンさんの2本の指の腹が、内側からクリトリスをトントンと押す。一方で、表側では、イッたばかりの突起を咥えられ、ちゅうーっと吸引圧がかかった。

「あっ♡いま、イッたばかりなのに、ああんっ！　だめ、そんなことしちや…」

「連続イキのよさを教えなきゃ、A V男優としての名が廃るよ」

「だめっ、やめてっ、ひいっ…いやあ、ホントにおかしくなっちゃうう！」

「今日はとことん乱れて良いんだよ」

襲いかかる快楽に、頭の太い神経が千切れそうだ。本能的にシノジュンさんの頭を遠ざけようと手でグイグイと押す。

「こーら、逃げないの」

「あっ、腰、押さえないでえ…きもちくて…だめなのおっ！」

「その怖いぐらいの快感が絶頂にひっくり返った時を想像してごらん」

「や…やあ…っ、んうう……」

「セックスがやみつきになるよ」

じうう、とクリトリスを強く吸われた。与えられる愛撫に、ただもう天井に向かって叫ぶように喘ぐしかなかった。

「吸うのも、トントンも……らめえ！ おかしくなっちゃう、おかしくなっちゃうっ！ はああんっ♡♡あ…またイク…吸わ、ないでえ…きちゃう…きちゃう……」

トントンと響く振動が頭を真つ白に染めていく。彼は優しくクリストリスを甘噛みした。耐えていた理性という名の神経が、ブチンと切れた。

「うああああッ♡♡」

腰を浮かせ、伏えるように叫ぶ。羞恥心など皆無だった。彼の顔の目の前で腰を何度も上下させる。やがて下半身の痙攣がおさまると、ピチヨピチヨの指を膣から抜かれ、ガクンッとベッドに落下した。息も絶え絶えのカラダに、シノジュンさんの指が這う。ススーッと脇腹をフェザータッチされ、全身が小さくピクついた。

「ふっ、う…いま…それだめ………」

「この瞬間は、どこもかしこも性感帯だよ。ほら、横向いて。背中も………」

「は……んっ、撫で、ないでえ………」

「鳥肌立つてる。感じてる証拠だ」

「いや……きもちいい………」

「こうやって、つつーと膣の中や脇腹を触られると、快感がマンコに響くだろう？」

「は…はっ……んんっ」

「イクのは性器だけじゃないんだよ」

「んあ、きもちいいの…のぼってくる…っ」

「それで良いんだ。首筋も鎖骨も触られただけで、ほら……」

「あ、はあっ…鎖骨のうえ…指だけで…っ、何回も…んん…っ、…っ♡♡」

「フェザータッチだけでイッちゃったね」

「んっ、んうっ……うそ……わたし……」

「ピクピク甘イキして…エッチな子だ」

「…っ♡」

カラダはもう、シノジュンさんの言いなりだった。とろけるように柔らかくなり、ペニスを挿入される準備はすっかり整っている。私は我慢できずに、彼の中心をじっと見た。いつの間にバスローブを脱いだのか、そそる褐色の肉体美が露わになっている。

中でも一段と目を引く、勃起ペニス。血管が浮き出たそれは天井に向かってそそり立ち、カリは存在を主張するかの様に縁どられている。幾多の女性器を貫いたペニスは、画面内にもしっかりと映っていた。

『あああんっ♡イッくう…っ♡♡』

『あ、だめっ、イッてるってばあ!』

『あ、ああ……もうゆるしてえ……っ』

ベッドに四つん這いになって鳴き叫ぶ女優に、背後からズンズンと容赦なくペニスを突き刺しているシノジュンさん。シーツは潮がかりすぎて、じつとりと広範囲に変色していた。

欲しい……私も……あんな風に……。

「チンコ欲しいの？」

「っっ、はい……」

「残念だけど、まだおあずけ」

「そう、なんですか……？」

「そんな子犬みたいな顔しないで。あとでちゃんとして、チンコでもイかせてあげるから」
「……♡」

「でもその前に、もう少しマンコをほぐしてあげなきゃ」

「ほぐす……？」

「ベッドから下りて、立ったまま右足を椅子にのせて……」

「こうですか……？」

「そう、いいね。片足を高く上げた方がマンコの開きが良くなるから。指、挿れるよ…」

「あっ…奥まで入って…きもちいい…んっ……」

シノジュンさんにカラダの奥、触られてる……。今なら、言えるかも……。

「シノジュンさん、お願い……」

「なに？」

「ゆび、ジュポジュポ……いっぱいピストンして欲しい、です……。シノジュンさんの手マ
ンで…イッてみたいって、ずっと思ってたんです……」

シノジュンさんは2、3度まばたきをした後、フツと眉尻を下げて笑った。

「…梨乃ちゃんは、どうしようもない淫乱だなあ」

「…っ♡」

「ファンの子にそんな可愛いお願いごとされるなんて、男優冥利に尽きるよ」

彼はそう言うのと、1本だった指を2本に増やし、卑猥な水音が聞こえるくらい蜜壺を荒らした。

「あああ♡♡♡はやい……ゆび、いいとこばっかり当たってる♡♡♡」

「いいとこって、ここ？」

「ひいっ♡そ、です……そこ、1番奥の……っ、すっごくきもちいい……♡」

「AVで見て妄想してた時と比べて、どうかな？」

ジュポッ♡ジュポッ♡ジュポッ♡

「あっ、ああっ…♡ほんものの、方が…何倍もっ、きもちいいですう……っ♡」

「良かった。このまま自分でクリオナしてごらん」

「へ……？ んあぁ♡♡い…いま、ですか……？」

「そう。梨乃ちゃんなら出来るよね」

「っ、はい……♡」

立つのもやっとなくせに、私は更なる快感を求めてシノジュンさんの片腕に掴まり、もう片方の手を下の突起に寄せた。突起に触れた瞬間、びりびりとカラダに電気が走った。

「あぁあ♡♡」

「クリトリスの感度上がったでしょ？」

「あぁっ、あ……あ、あ」

「聞こえてないか」

彼の2本の指が膣の中でくぱくぱぁっ、と開いたり閉じたりを繰り返して、ペニスが入りやすいように広げている。部屋の中にはAVと現実、2人の女性の喘ぎ声が重なり合っ

いた。

「このぐらい広がれば……そろそろ大丈夫かな」

「んっ、ん、ん……ううう……」

彼の言葉は、半分も耳に入ってこなかった。クリトリスを弄ることに夢中な私は、突起の先端をこすり続けていた。

「つて、あー、梨乃ちゃん、すっかりメス顔になっちゃって」

「ひいんっ♡イクッ♡イクッ♡イクウ♡♡」

「必死な顔しながらも、クリ弄る手が止まらないね。いつでもイッていいんだよ」

指を3本に増やされ、ピストンに圧迫感が増した。ドリルのように、指が勢いよく奥まで貫いていく。愛液は、彼の指を伝ってだらしなく垂れ続けていた。早くまた絶頂に辿り着きたくて、爪でクリトリスをこねくり回した。

「イッ……♡♡」

ガクガクと全身がわななき、腰の力が抜けた。その場にガクンと崩れ落ちそうになったカラダをシノジュンさんの太い両腕に抱きとめられた。彼の耳元で乱れた呼吸を繰り返す。クリストリスも、膣も、かつてないほど敏感になってるのがわかった。

「……ごめん」

「え…？ シノジュンさん…？」

「出来れば正常位で挿れてあげたかったんだけど、梨乃ちゃんのエロい姿を見てたら、俺ももう我慢できないわ」

ズンッ。右足を上げた状態の開いた膣口に、垂涎していたペニスがとうとう侵入した。

「あああッ♡♡おち…おち……」

「マンコに全神経集中して」

下から突き上げるペニスの勢いで、快楽の波が頭のとっぺんまで昇っていく。あんなに気持ちよかった手マンの快感を軽く追い越すペニスの存在感。

これが、シノジュンさんのおちんちん…♡

長年の妄想をはるかに超えるテクニクに、唇をブルブルと震わせて身悶えた。その間も、太く、また長い雄の性器は、何度も子宮口をこじ開けようと体当たりしていた。

「きもちっ、きもちいいああ♡♡」

「っ、こんなに足広げてても、マンコきついっか…っ…」

「どちゅん、どちゅんって突かれて…ああっ♡奥にひびーてる……これ好きいっ♡」

「梨乃ちゃんのエロい喜び方…やば、スイッチ入ってきた」

ズプッ♡ズプッ♡ズプッ♡

「え……やああ♡はげし……ふ、うう……」

「気持ちいい場所えぐってあげる」

「あ、う……っ、もうダメえ……ッ♡♡」

目尻に溜まった涙を飛び散らし、痙攣とともにペニスを膣内に閉じ込めた。

「しめつけすぎ……くっ」

「あ……はあ、はあっ……」

必死で酸素を吸い込んでも、呼吸も気持ちも昂ぶったままだった。

「梨乃ちゃん、このAV好きなんだよね」

「え……っ、はい……」

「じゃあ、『あのシーン』覚えてるよね」

したり顔の彼の親指が、硬く膨らんだ突起に寄っていく。彼の巧みな前戯ですっかり刺激に弱くなったクリトリス。突起に触れる直前に気がつき、女優さんと同じようにイヤイヤと首を振った。

「それだけは……だめ……」